

## 論文内容要旨 (乙)

### Utility of patch testing for patients with drug eruption

(薬疹患者に対するパッチテストの有用性の検討)

Clinical and Experimental Dermatology 39 巻 2014 年

内科系皮膚科学 大歳晋平

背景：薬疹において原因薬剤を同定する検査法の 1 つにパッチテストが挙げられる。パッチテストは内服(再投与)試験に比して安全性が高い反面、その有用性については明らかな結論が得られておらず、1施設での長期間にわたるデータの解析結果は報告されていない。

目的：薬疹患者に対して施行した 20 年間のパッチテスト結果から、薬疹の原因薬剤同定におけるパッチテストの有用性を検討することを目的とした。

対象と方法：1990 年 4 月から 2010 年 3 月までの 20 年間に昭和大学病院附属東病院皮膚科を受診し、薬疹が疑われ、原因薬剤を同定する目的でパッチテストを施行された 444 名(男性 151 名、女性 293 名、平均年齢 49.9 歳)を対象とした。試薬は対象者の背部健常皮膚に貼布、48 時間後に除去した。判定は貼布 48 時間、72 時間後に ICDRG(International Contact Dermatitis Research Group)基準に基づいて行い、72 時間後に(+)以上を陽性とした。

結果：陽性反応は 444 名中 100 名(22.4%)に認められた。臨床型別の陽性率は重症型薬疹の 1 型である薬剤過敏症症候群(drug-induced hypersensitivity syndrome: DIHS)では 9 人(56.3%)に陽性反応が認められたが、そのうち 8 人はカルバマゼピンに陽性であった。次いで丘疹紅斑型 23.6%、固定薬疹 20.0%、多形紅斑型 8.1%の順に高かった。薬剤別に陽性者数・陽性率が大きいのは造影剤(53 人・41.1%)、次いで中枢神経作用薬(18 人・28.6%)このうち 16 人は抗けいれん薬、さらにこのうち 12 人カルバマゼピンに陽性、非ステロイド系消炎剤(11 人・10.9%)、抗生剤・抗真菌剤(9 人・7.1%)の順であった。

考察：薬疹患者に対するパッチテストの陽性率は、臨床型よりも原因薬

剤によって異なっていた。パッチテストは薬疹の被疑薬剤が造影剤や中枢神経作用薬、特に抗けいれん薬の場合に有用な検査法と考えられた。長期間にわたるパッチテストの結果の集積から、薬剤ごとの最適な試薬濃度、基剤についても考察を加えた。パッチテストの有用性をより高めるためには、試薬作成法、判定方法、検査方法のさらなる標準化が必要と考えられた。